

笑いの表現としての三猿

——上田秋成『諸道聴耳世間狙』の書名、序の解釈

志堅原 あさこ

要旨

本稿は、上田秋成（一七三四年～一八〇九年）の浮世草子『諸道聴耳世間狙』では三猿を裏返す「笑いの表現によって気質物の特徴である批評性が包み込まれている」と論じるものである。これまで、『世間狙』は秋成の皮肉的な暗い笑い、登場人物らの救い難い人生に特徴があると指摘されてきた。書名や序の解釈をめぐっても諸説ある。だが、秋成が「猿」をなぜ素材としたのか、それによつてどのような効果が生まれているのかについて十分には検討されていない。そこで、本稿では『世間狙』の「猿」を三猿として解釈を試みた。その結果、江戸時代における三猿の認識、猿と笑いの関係から、秋成は三猿を裏返すことで笑いを表現していると明らかにした。くわえて、浮世草子と噺本は文体表現の面で関わりが深いことから『世間狙』が鳥亭焉馬『落噺 無事志有意』の序に影響を与えた可能性を主張する。他にも、三之巻三回「雀は百まで舞子の年寄」にも猿の諺や故事、庚申に関する記述が確認されることから、序と同じように「猿」が笑いの素材として用いられていると考察している。

キーワード：上田秋成、雀は百まで舞子の年寄、気質物浮世草子、庚申、咄、鳥亭焉馬

- 一 本稿での「三猿を裏返す」という言い回しは、「見ざる、聞かざる、言はざる」の三つを「見る、聞く、言う」と正反対に行っているさまを意味している。
- 二 書名『諸道聴耳世間狙』の「狙」は「猿」の異体字である。本稿では「猿」と表記を統一する。

Three wise monkeys as an expression of laughter : Interpretation of the title and introduction to Akinari Ueda's “Shodokikimimisekenzaru”

SHIKENBARU Asako

Summary

This paper argues that Akinari Ueda's "Shodokikimimisekenzaru" parodies "three wise monkeys" in the opposite way¹ to the original to create witty laughter which is typical of a temperament story known as "Ukiyozoshi". It has been pointed out that "Sekenzaru" is characterized by Akinari's cynical, dark laughter and the hopeless life of its characters. There are also several persuasive views on the interpretation of the book title. However, why Akinari used "monkey"² in that way and what kind of effect it had on his work have not been studied so sufficiently as the interpretation of the book title and the introduction. Therefore, this paper focuses on the "monkey" in "Sekenzaru" and interprets it as an alteration of "three wise monkeys". Based on the recognition of "three wise monkeys" in the Edo period and the relationship between "three wise monkeys" and laughter in literature, it is clarified that "three wise monkeys" is described in the opposite way, and that this is an expression of laughter. In addition, this paper points out that since the Ukiyozoshi and the storytelling books are closely related in terms of stylistic expression, it is possible that "Sekenzaru" may have influenced the introduction of "Otoshibanasi Bujishui" written by Enba Utei. Other references to monkeys, proverbs, and stories about them, as well as descriptions of Koushin, are also found in the third episode of " Suzume wa hyakumade maiko no toshiyori " leading us to consider that "monkeys" are used as material for laughter in the same way as in the introduction.

Keywords: Akinari Ueda, "Suzume wa hyakumade maiko no toshiyori", the temperament story known as "Ukiyozoshi", Koushin, Story, Enba Utei

¹ "Three wise monkeys" is a proverb in Japan, meaning "see no evil, hear no evil, speak no evil". "The three wise monkeys" in the opposite way in this paper means that in "Sekenzaru" Akinari described "see, hear, speak" attitudes, which is in the opposite way to the proverb.

² The "狙" in the book title "Shodokikimimisekenzaru" is a variant of the Chinese character for "monkey. In this paper, "猿" is used instead of "monkey."

はじめに

『諸道聴耳世間狙』（以下『世間狙』）は、当時実在した人物をモデルに戯画化して、世相を風刺した気質物浮世草子^一である。明和三（一七六六）年に刊行された。本書の題名について、中村幸彦らは「世に伝わる噂話を悪戯気たつぷりに誇張して描いた（諸道聴耳世間狙）」という、本書の方法を明示したものに他ならない^二と述べる。開版願書が「明和元年十一月」であることから「開版時の干支を書名に取り込んだとも考えられる」^三という説もある。先行研究において、『世間狙』の「猿」を三猿と指摘するのは森山重雄である。森山は、人の「形代」とされる猿が滑稽な姿で処世訓を表わすさまに、秋成は教えを守ることのできない人間の絶望の表れを感じとつたと考察する。しかし、三猿は「江戸の流行神」であった側面ももつ。また、他の文学作品では笑いを誘う存在としても用いられている。そこで、本稿では当時の三猿への認識を踏まえて『世間狙』の「猿」を考察する。

一．先行研究

秋成の浮世草子に関する研究史はモデルの追求にはじまり数多くの蓄積がある^四が、ここでは『世間狙』の書名、序を論じる先行研究を確認する。

まず、改めて森山の見解をみておきたい。序の解釈のなかで、三猿は三つの教えのうち一つも守ることができないという人間の絶望の表れであるとして次のように述べられる。なお、三猿とは三匹の猿がそれぞれ、両手で目を覆い（見ざる）、耳を覆い（聞かざる）、口を塞ぐ

（言わざる）ものである。

その点からみるならば、この三猿も、猿に演技させながら、人間じしんは三猿を一つも実行できないという絶望を風刺的に表出しているのかもしれない。この代理演技は所詮手の長い猿だから可能なのであり、人間じしんは三猿などを始めから信じちゃいなかったのかもしれない。その代償の皮肉が、猿という形代を通しての滑稽な姿態となつたのであろう。秋成もその間の機微を感じたらしく、「いは猿の戒を守れば、白痴狙の指さしにあふ」と反論している。

人には守ることのできない教えを敢えて猿に託す皮肉を秋成が感じとつたため、あのような序文が書かれたとする解釈である。

本見解は、三猿が処世訓として広く理解されていたことを前提とするものである。だが、三猿は処世訓と同時に庚申の使いとして認識^五されていた面も大きい。

次に、『世間狙』は「もろもろの道について聴耳を立てる世間の猿（の書き上げ・報告書）」とするのは山本秀樹^六である。「序文を読まない」と題の意味に到達できないようでは、題意が自立していない、と評さなければならぬし、それでは、題が題としての役割を果たさないであろう」と立場を明らかにした上で、書名の意味を次のように解釈している。江戸時代の京都や大阪では「町人のうち、町奉行所与力同心への密告役となつた者」が「猿」と呼ばれたことを根拠に、当時の大阪の人々は書名の「猿」を珍しい噂を聞き出してお上に告げる「猿」と想定した^七。そして、「書名は、本作が、世間の『猿』がするように、

(古今の) 噂を利用、あるいは悪用して作られたものであることを含意している」という。書名を密告者の「猿」とする解釈は、浮世草子と関係の深い咄を専らとした者を想定する点で鋭い指摘である。また、たしかに書名とは序文に先立って存在するものであり、序文の理解によって題意を補えば、書名に含意されていないものまでも投影させてしまう恐れはある。しかし、「猿」の語によって連関する書名と序文を並べて検討することは、表現としての効果を考察するうえで有効と考える。本指摘を受け止めつつ、考察していく。

最後に、『莊子』との関係から解釈を試みる研究としては二つが挙げられる。浮世草子と初期読本の間に位置する秋成浮世草子の特徴を論じる篠原進^八は、信更生『都莊子』と『雨月物語』巻之五「貧富論」が通底するとの指摘^九を踏まえて、さらに『都莊子』と『世間狙』の関係を探る。そのなかで、『世間狙』の書名は『都莊子』の「朝三暮四」と題される冒頭章の「朝三暮四をしらぬ衆狙」をも含意するとして『都莊子』からの「猿」の摂取を指摘している。また、『世間狙』を評釈する穴戸道子^{一〇}は、『莊子』において「猿」が「より直接的な意味で、本質を知らない愚かな存在の象徴として登場している」ことから、次のように「猿」の解釈を提示する。

本作の各編で描かれているのは、こうした愚かな人々、ずるい人々、間の抜けた人々の姿である。であれば本作はまず最初に、そのような「世間の猿」たちの姿を描いたもの、と解されて良いだろう。そのとき題号『諸道聴耳世間狙』は、もろもろの道での「諸道」^{一一}、噂話に聞く「聴耳」^{一二}、世間の猿じみた人々の姿（「世

間狙」）、と解釈することが可能となるのではないだろうか。

二つの見解は、秋成浮世草子が『莊子』や初期談義本から受けた影響を考えるうえで重要である。だが、本稿では「猿」を庚申信仰から捉えることで同時代の文学作品との関係も考えてみたい。

以上のように、先行研究において『世間狙』の「猿」を三猿と指摘するのは森山のみである。これらの見解を受けて、本稿では更に当時の三猿への認識や他の文学作品での描かれ方と比較しながら「猿」の解釈を試みる。

二、三猿と笑い

三猿は、日本語の否定形「ざる」が動物の「猿」と同音であることから、猿によって寓意されたものである。現代では日光東照宮の神厩舎の三匹猿が有名だが、実は三匹猿の形が多く見られるのは村里に残る庚申塔であり、庚申の本尊を青面金剛として三匹猿を侍者とする説が一般的な理解である^{一三}。祭神としての庚申は、仏教では青面金剛、神道では猿田彦を祭る。本来は、中国において晋の時代から説かれていたとされる「守庚申」^{一四}が日本に伝わり、平安時代の貴族社会において行われ、それに仏教や神道が融合したという。一方、民間に広まった庚申信仰は、村落社会の講と呼ばれる組織と結びつき、講の間とともに夜を徹して庚申の祭事（庚申講や庚申待）を営むようになった。庚申信仰の中心は「夜籠もり」にあつたとされ、庚申の夜の禁（同衾）を犯せば盗人が生まれるという俗信^{一五}や「話は庚申の夜」といった言葉が現在でも伝えられている。

また、『和漢三才図会』では「庚申」の項目で三猿について記されている。ここでは、三戸さんしを天帝の元へ行かせないために村々で集合して、夜通し起きることが述べられる。三戸とは、道教において人の身体のみならず絶えず行動を監視している三匹の虫のことである。庚申待の伝来に関する記述のあと「青面金剛ト號ク其前二三ノ猴有一ハ兩手ヲ以眼ヲ塞キ一ハ耳ヲ塞キ一ハ口ヲ塞テ以視ザル聴ザル言ハザル之戒ト為乎」^{一四}と記される。本項の末尾では、「みずきかざりはざる三つのさるよりも思はざるこそまさるなりけれ」と三つの戒めを守ること

で幸福になると欲張ることが制限されている。
日本に伝えられる三猿の起源を研究する飯田道夫^{一五}によれば、庚申塔の成立年次が江戸時代初期の江戸で急増していることから庚申を「江戸の流行神」^{一六}とする説もある。飯田は著書において、猿は元来「笑いの材料」^{一七}にされたとして烏亭焉馬の『落断無事志有意』を例に挙げている。これを手がかりに猿が笑いの材料にされている様子を確認したい。

焉馬は、談義本、洒落本、滑稽本作者で、咄の愛好者を組織して素人の咄を盛んにした人物である^{一八}。『落断無事志有意』は、寛政四（一七七二）年より年中行事化した「咄の会」^{一九}に集まった落断から焉馬が秀作を選んだ作品集である。寛政一〇（一七八八）年に刊行された。大衆によって作られた小咄の集まりは、天明期に生まれた小咄の落ちに向かつて簡潔に終わる特徴が失われており、「冗長間のびした文体で、鋭さや粋な味わいは失われてしまっている」^{二〇}と評価される。内容は、作者の創作ではなく先行する咄の焼き直し^{二一}とされ

ている。『落断無事志有意』の序^三は、芝居の断初と新春の咄を利かせる言葉から始まり、そのなかで次のようなつらねが述べられる。

年々歳々花あいくち、焉馬えんばがはなしをするならば、七左衛門しちざゑもんが聞ふとは、河豚かぶとに大根だいこん、鴨かむに葱ねぎ、市いちが榮さかる下津町したつまち、祖母ぢいは山の手やまて、祖母おばあは川端橋かわはた々に、咄はなしの評判ひやうぱん四里四方よほろ、聞きべい見るべい話はなしすべい、庚申こうしんまちに白猿はくげんが、三筋さんしんたらねへ序じよのせり譜ふ、福茶ふくぢにうかれた戯言たはじとと、ホ、うやまつて、坊主ぼうずにはなりませぬ。

「年々歳歳花相似」と「合口」（話が互いによく合うこと）が掛けられ、話し手・焉馬と聞き手・七左衛門の関係を深い取り合わせと言い表す。物語やお伽話の終いのきまり文句「市が榮える下津町」に対応する「山の手」をつづけ、咄の評判が江戸中に広まるとする。次の表現には、庚申待と咄の関係が示されている。守庚申を遂げるために人々が寝ずに歌会や咄の会を行ったことから「見ざる、聞かざる、言わざる」をもじって「聞くべい見るべい話すべい」とおどける。これは、本来意味するものとは正反対の意味を三猿に担わせており、三猿の戒めは裏返されている。次節で考察する『世間狙』の序にも確認される方法だ。つづけて、「猿」つながりから「白猿が、三筋たらねへ序のせり譜」と「猿は人間に毛が三筋足らぬ」^{二三}という俗説を踏まえた團十郎の謙遜した号が引き出されている。最後は「ホ、うやまつて」とつらねをふまえて締められる。このように、『落断無事志有意』の序には庚申待の習慣、三猿の戒めの裏返し、猿を人よりも劣った生きものとする俗説が取り込まれている。殊に断本において三猿を裏返しておどける表現が確認されることは、三猿と笑いの繋がりを示すものとして注

目すべきだろう。

他にも、夏目成美^{三四}の俳文「三猿箴」^{三五}（初出は寛政二（一七九二）年）でも三猿はユーモアとして用いられている。成美と久二、糸が「三猿の遊び」（三猿の身振りを真似たもの）をする様子とともに、女の色気に身を滅ぼしてはならない（見ざる）、男の口に騙されてはいけない（聞かざる）と二人を案じる親心が綴られたあと、次のようにつづく。

さて我は常に無益の辨を好みて、人と争ひ、或は恨み怒られて、悔ゆる事あまた度あり。犬のよく吠ゆるをよしとせず、人のよく物いふを賢とせずとかや。今より此の物言はざるのかたちを、わが身の戒めとして、長く口をして鼻の如くならしめむと、やがて三猿の箴書きて、自ら戒め、かつかの二子に頒ち與へ侍る。

ここでは、「口を蔽」って言わ猿を演じた成美が自身を振り返る。子心配しながらも自らが口を慎むことはできないと自覚しつつ「三猿の箴」を書いたと茶目つ気の効いた洒落が披露されている。『落嘶無事志有意』のような大胆さには欠けるが、三猿を利用した面白みのある文章である。

以上のように、三猿は庚申の侍者として知られる存在であり、人々には庚申信仰や庚申待の風習、三猿の戒めが伝えられていた。また、庚申信仰との繋がりにおいて咄や庚申待の語から連想される存在であったことも明らかになった。三猿とは、三つの戒めがもじられることで教訓性が裏返されたり、人真似をする猿を更に人が真似る遊戯として描き出されたりと笑いを誘う存在であった。元々、猿が人よりも

劣った生きものであるとの意識、その意識から発生した言い回しと組み合わされることで、三猿と笑いとの結びつきが深められた側面もあるように思われる。これらを踏まえて、次節では『世間狙』の序を考察していく。

三、『諸道聴耳世間狙』の序

考察にあたり、『世間狙』の序全てを引用する^{三六}。

彼賢人の中間法度に。偽めきし真かたるとも。真くさき虚言はつかぬものとや。釈迦の藏経莊子の南華経。うそのまことのまことうそで。おもはくは我がこゝろより出て人の口にかはりゆき。貂となり鼬となる。其尾に喰つく世の噂を。天に口なし。婆娑のそしりはしりにも。いは猿のいましめをまもれば。こけ狙の指ざしにあふ。さらば尻わらひの戯れ草を朝三暮四の筆まめに書聚めて。題号を。聴耳世間狙とよぶ事は。見猿の人の伽ともならんかし。

まず、七賢人の仲間の掟として嘘のような真実は語っても本当らしい虚言をついてはいけないという「寓言論」^{三七}に始まり、つづけて仏教や道教の教えといったものは実でも虚でもあるとする「虚実論」^{三八}が述べられる。次に、「こゝろ」から出ていった「おもはく」は、他人の口を通じて様々な尾ひれがついて形が変わってしまうと噂が変化していく過程が述べられる。そして、三猿の戒めを用いながら世間の噂についての論を展開する。

ここからは、「猿」に注目して考察を進めたい。まず、世間の噂に

まで口をつぐんで礼を守っていれば「こけ狙」に指されて笑われるという。猿が笑う諺としては「九百九十九の鼻欠猿、満足な一匹の猿を笑う」がある。「こけ狙」とは、自分の欠点に気がつかずに他人を嘲笑する猿、つまり序を書いた作者を笑う「婆嬬」や噂を弄ぶ世間の人と理解できる。

次に、猿にまつわる諺、故事の二つが引かれる。一つめは「猿の尻笑い」である。この諺は、尻が赤い特徴をもつ猿が自らの尻には気がつかずに他の猿の尻を笑うことを意味している。本書を「尻わらひの戯れ草」と言い表す書き方からは、欠点に気づかぬそぶりで世間を笑っている自らも「こけ狙」と同じであるとの作者の意識がうかがえる。二つめは、「朝三暮四」の故事である。ここでの「朝三暮四」の引用には、朝夕という意味と世間の人を愚弄する意味が含まれている。言うまでもなく、「朝三暮四」とは猿飼いが芋の実を与えるのに個数を変えずに言葉だけで誤魔化したところ、猿が喜んで受け入れた話である^{二九}。物事の本質を見ずに目先で判断した猿を笑うもので、世間の人が作者を笑う様子が「朝三暮四」の猿に擬えられている。なぜなら、作者は噂を知った時点で三猿の戒めの一つ「聞かざる」を破っていたからである。「いは猿のいましめ」を守る作者が、噂を悦ぶ世間と変わりがないことに気がつかない人々は、まさに本質を見ることができない「朝三暮四」の猿と同じである。

最後に、作者は本書を「聴耳世間狙」と名付けて「見猿の人の伽ともならんかし」と閉じる。ここで「伽」の一語に注目したい。「伽」は、話の相手をして退屈を慰める意味をもつ。延広真治^{三〇}は、秋成のも

う一つの浮世草子『世間妾形氣』の序にある「荒唐世説を。いはざれば夜食の腹ふくるゝよと。宵よりつどいて七つの鐘聞く夜はあまたゝび。三との記述から、秋成の自宅を「咄の会所」であつたろうと指摘する。また、「講釈・落語と文学」^{三一}においても、秋成の自宅は「落咄の会所」であり、「秋成は咄仲間の頭取」で「咄番に当たつた秋成は咄仲間をさぞ感心させたことであろう」とも述べている。これら延広の指摘から「見猿の人の伽ともならんかし」という記述も、未だ噂を知らぬ人に披露する、または咄の種を提供する「咄の会所」を意識したものと考えられる。このことから、『世間狙』と『落断無事志有意』の序が三猿を裏返す点で共通するのは、『世間狙』が「咄の会所」を意識したものであり、『落断無事志有意』も「咄の会」の成果を編集、上梓^{三二}したものであるためと推測できる。しかも、二つの共通点は「咄の会」以外にもある。

咄本と談義本、浮世草子の三つは、「滑稽性、風刺性、世相・風俗の描写、会話体を多用する文体」^{三四}において関連が深いと指摘されている。断本の表現・文体を検証する鈴木久美^{三五}は、次のように述べている。

断本、つまり書型作品の咄を制作するにあたって、読み手の需要に依って新しい落ちをもつ新作笑話を際限なく次々と生み出すことは事実上困難である。そうした場合、読み手を引きつけるには、既に読み手が知っている骨組みに、作者の個性や能力でどういった目新しい表現上の肉付けがされるのかという点が重要になってくる。

『落断無事志有意』も他の断本と同じく先行する咄の焼き直しという性格をもつことから、焉馬によつて書かれた序も先行するテキストの影響を受けたとは考えられないだろうか。筆者は、断本の確立期（二六七三〜一七七二年）に該当する時期に大坂で刊行された『世間狙』が、文運東漸の流れとともに断本の全盛期（一七七二〜一八〇四年）に江戸で刊行されたであろう^{三六}『落断無事志有意』に影響を与えた^{三七}と考える。焉馬は、三猿を正反対の意味で用いるという秋成の笑いの手法を落断作品集に取り込み、江戸の下層の口語体「べい」を加えて肉付けしている。『莊子』からの影響が指摘される『世間狙』の「猿」は、書名と序のなかに散らばつて配置されること^{三八}で、見ざる、聞かざる、言わざるの主語が世間の人々なのか、作者なのか判然とせず、そのために少々高尚めいている。だが、『世間狙』からの影響がうかがえる『落断無事志有意』では、大衆によつて作られた落断集に相応しくなるように焉馬が工夫を施している。その工夫とは、裏返された三猿を連続して並べることで直接的に表現するものであり、「べい」の音によつてリズムカルかつ通俗化するものであった。三猿を裏返す笑いを、より卑近なものとして工夫した点に『世間狙』とは異なる個性がある。

以上の考察から、秋成は世間の噂に聴耳を立て、噂を草子として語り、未だ噂を知らぬ人々に「伽」を提供するという裏返し^{三九}の三猿によつて戒めを破つているといえる。気質物は一般的に一つの偏った性格を描き出して批評する教訓性、その批評性を笑いの表現で包み込む方法をもつ。一方、秋成の浮世草子では『笑い』の成分自体に毒性が含まれて^{三八}おり、本傾向は『世間狙』で顕著にみられるとされる。た

しかに、『世間狙』には孝行のために相撲興行によつて稼いでも貧乏神に憑かれて病みつく相生浦之助^{三九}や息子二人を失つても如来を祈り続ける父親・太郎右衛門^{四〇}のように、最後まで報われない深刻な話がある。だが、秋成はそれらを包み込む笑いを本当に描いていなかったのだろうか。筆者は、そうではないと考える。三猿は笑いと結びつけられる存在であった。それを踏まえて、秋成は書名で「聴」か猿、序中で「いは猿」「見ざる」を裏返してみせた。そうすることによつて、『世間狙』に笑いの表現を持ち込んでいる。そして、この秋成の表現は後世の『落断無事志有意』に影響を与えている。ここでは、焉馬によつて三猿の裏返しは通俗化した笑いの表現へと変容させられていた。

四 五郎市の宿命という落ち —— 「雀は百まで舞子の年寄」

秋成は三猿を裏返すことで笑いの表現を利用していた。言い換えれば、三猿の戒めを破る形ともいえよう。実は、戒めが破られるのは序だけではない。三之巻三回「雀は百まで舞子の年寄」でも、宇治江と鬼若の弁蔵の同衾によつて庚申の夜の禁が破られている。

「雀は百まで舞子の年寄」の枕には、六〇歳過ぎの後家の話がおかれる。内容は、次のようなものだ。後家は好色な男と関係をもつて家に帰らなくなる。それを心配する後家の長男は手代を迎えに遣わされるが、後家は馬鹿なことばかり言つて聞かない。それでも、手代は何とか内密に役目を終えたと思つていたところ、既に世間には噂が広まつていた。枕の最後は、親の業によつて息子が災難に合うことを気の毒がる一文で終わる。

次に、本話（宇治江と五郎市の話）を概括する。京の辰巳屋の宇治江は五〇歳を過ぎてても派手な様子で舞子勤めをしていた。ある日、智積院の僧の座敷に呼ばれるも「皺くらべにはこぬ」と年寄りであることを悪く言われる。腹を立てた宇治江は口達者に僧らを言い負かし、帰っていった。そんな宇治江には、実は三四、五歳の時に生んだ子があつた。庚申の夜に鬼若の弁蔵との同衾で一夜孕みした男の子である。大変美しかったので石河五郎市^{四一}と名付けて陰間にしたが、手癖が悪く、親方からいとまを出されてしまう。京に居られなくなった五郎市は江戸の両国橋で若衆の惣嫁となる。

右記のように、枕と本話を並べると年寄り女のあせない色気の凄みを面白おかしく描き出す意図で繋がっていることがわかる。そのため、五郎市の話だけ不自然に浮いてみえる^{四二}と指摘される。だが、宇治江が庚申の夜の禁を破つたことで五郎市が盗人の宿命を負わされたと思ひ起こしてみると、五郎市も後家の息子と近い境遇にあると指摘できよう。「雀は百まで舞子の年寄」には、二人の年老いた女の色気の滑稽さ、その滑稽な振る舞いから生じる世間の噂、逃れることのできない宿命が息子たちに降りかかる悲劇が描き出されている。ここにも、秋成特有とされる暗い笑い、救いがたい登場人物らの人生を確かめることができる。

五郎市の話にも「猿」にまつわる言葉が見つげられる。客の持ち物に手を付けたことが親方に知られ、五郎市が警告を受ける場面^{四三}である。

あきれ果てのこは異見に当座は聞たやうなれど。目のゆきやすい

聞のうち。愛想も月の手長猿。尻からはげてくるなれば迎もなをらぬ根性と見かぎり果て長のいとま。

「愛想も月の手長猿」は、「愛想を尽かす」（嫌になる）、「猿猴が月を取る」、「手が長い」（盗癖がある）の三つを掛けた表現である。「猿猴が月を取る」は、猿が水面に映る月を取ろうとして、おぼれ死んだ故事に基づく喩えである。五郎市は、盗人と陰間という二つの性格をもつ人物である。「猿」にまつわる諺は、五郎市の盗人という性格と掛けられている。なぜなら、「猿」は狡い者や卑しい者をあざける喩えとしても用いられるためだ。「猿猴が月を取る」の猿がものを取るさまと手癖の悪さを意味する「手が長い」という諺が掛けられることで「猿」と盗みは結びつけられている。つづけて、「尻からはげてくる」は「尻が割れる」と同じように悪事や秘密が露見するという意味をもつ。「尻」は「猿」の縁語であり、また「陰間」の縁語でもあるので五郎市の陰間という性格も重ねて表現されている。本引用箇所は、縁語によつて五郎市の陰間という性格が表現され、また、ものを取ることを意味する諺と「猿」が掛けられることで盗人という性格が表現された戯文といえよう。

ここで、いくつもの諺を掛け合わせる秋成の方法については次のような指摘がある。「世間猿」というテキストの面白さは、プロットにも世相風俗の描写にも風刺・批評にもなく、ほとんど言葉・文章のみを支えられている」とする風間誠史^{四四}は、次のように述べる。

しかしそうした悲惨な話も、すべて先に見たようなレトリックや語彙の羅列によつて笑い話としか読めないように書かれている。

いや、そうした言葉遊びが眼目だからこそ、どんな悲惨な話も笑い話として書かれ、読まれ得るのである。

たしかに、五郎市の性格を盗人に設定して「猿」にまつわる諺を掛け合わせる作者の方法は、五郎市の宿命を笑いへ転回させる手法といえよう。陰間として繁盛しても満足せずに高望みする五郎市は、宇治江の逞しさと強かさを確かに受け継いでいる。その逞しき、強かさを盗人という歪なかたちで実践する滑稽さが、人よりも劣っていることされる猿の表現と重ねられることで、盗人の宿命は盗みの露見という失態、笑いとして転じられている。だが、本編における笑いの方法は言葉遊びの他にもみつけられる。五郎市の盗人という生き方には、本編の暗さを包み込む働きがある。末尾^{四五}を引く。

引きとめられて挑灯のあかりにちらと見た顔じゃ。たしか堺町の五郎市と立もどりが気が付て。腰の巾着あるかと見れば南無三はや仕てやられた

末尾では、誰かが五郎市に巾着を盗み取られる落ちが用意されている。これは、枕における色気の話だけでは成り立たないものである。換言すれば、宇治江が庚申の夜の禁を破ることで成立するものといえよう。以上の考察から、秋成は三之巻三回「雀は百まで舞子の年寄」では、宇治江に庚申の夜の禁を破らせることで落ちをつけているとわかった。くり返しとなるが、秋成は序で三猿を裏返すことで気質物の批評性を包み込む笑いの表現を利用していた。それと同様に、本編では宇治江に庚申の夜の禁を破らせることで落ちを用意している。つまり、本編の悲劇である五郎市の宿命は、一方では笑いを引き出すために意

図的に配置されている。また、庚申信仰や猿にまつわる言葉がいくつも確認されたことから「猿」は『世間狙』の笑いの素材として利用されていることも明らかとなった。

おわりに

以上、本稿では『諸道聴耳世間狙』の「猿」を三猿と解釈して、秋成は三猿を裏返すことで秋成の浮世草子の暗さや困難な人生を包み込む笑いの表現を用いたと論じた。

まず、第一節では書名と序に関する先行研究を整理して、「猿」については検討の余地があること、当時の三猿への認識や他の文学作品と比較する必要があることを示した。次に、第二節では三猿が江戸時代において庚申の侍者として広く認識されていたことや庚申侍の習慣から咄とも関係があることを確認した。あわせて、同時代の噺本でも三猿は裏返されており、俳文では遊戯のモデルとなっていることから笑いと結びつきが強いことを明らかにした。『世間狙』の序を考察した第三節では、猿にまつわる諺や故事、裏返された三猿が笑いの表現となっていることを示した。そして、『世間狙』の序の「伽」の語から秋成の浮世草子が「咄の会」を意識したものであること、浮世草子と噺本は文体表現において繋がりがあることを根拠に、焉馬に影響を与えた可能性があると主張している。最後に、第四節では三之巻三回「雀は百まで舞子の年寄」で序と同じように戒めが破られていることを示した。猿にまつわる諺や故事を用いながら、庚申の夜の禁を破ることで落ちをつける笑いの手法は三猿を裏返す表現と通じるものであ

る。

秋成は、皮肉的な暗さや困難な人生を描き出す『世間狙』の批評性を包み込むために、「猿」や三猿を笑いの表現として用いていた。それは、『落晰 無事志有意』に影響を与えたと考えられる。だが、三猿を裏返す方法はそのまま後世に引かれたものではなかった。『莊子』から影響を受けていた『世間狙』の三猿は高尚めいた印象を与えるが、『落晰 無事志有意』の三猿は卑近・通俗化しており、大衆的な笑いの表現へと変容させられている。

秋成による笑いの表現や手法を考えるためには、より多くの用例の考察や他の文学作品との影響関係、類縁性も検討していく必要があるだろう。それは今後の課題としたい。

注釈

- 一 気質物の特徴や成立については、田中伸「気質物の方法とその限界」『近世文藝』一号、一九五四年、四八～五六頁、西島孜哉「気質物成立考」『文学研究』一四卷、一九七三年、四一～五一頁を参照した。
- 二 中村幸彦編『上田秋成全集』第七卷、中央公論社、一九九〇年、三六九頁
- 三 篠原進「ミネルバの鼻の行方——『世間狙』と『妾形氣』のあいだ」『文学』一〇〇巻一号、二〇〇九年、一三〇頁
- 四 近衛典子「研究史を知る 秋成の浮世草子」『西鶴と浮世草子研究』五巻、二〇一二年、二二九～二三三頁
- 五 飯田によると、「見ざる言わざる聞かざる」が初めて諺として見られるのは熊本藩の伊沢長秀が著わした『本朝俚諺』（一七二五年）、出典は『省心録要』が挙げられるという。太田全齋が『諺苑』（一七九七年）で『本朝

俚諺』を引用したが、活字本として刊行されたのは一九四四年である。同じく太田の江戸時代の代表的な国語辞書とされる『俚諺集覧』も稿本としては残されていたが、増補刊行されたのが一九七〇年代であることから、飯田は「三猿の教えを道徳訓として説いてきた人はいらぬ。比叡天台しかり、儒家しかり。しかし、大方のひとには馬耳東風だった。一般の人がなじんでいた三猿は庚申信仰のそれである」（二一頁）と述べる（飯田道夫『世界の三猿 その源流をたずねて』人文書院、二〇〇九年）。

六 山本秀樹「諸道聴耳世間猿」の意味」『近世文藝』七〇号、一九九九年、四七～五八頁

七 また、芝居や能といった活動場所で噂を収集する「猿」の働きは、本書の素材や内容に反映されているとも述べる。

八 注三、二一九～二四一頁

九 中村幸彦は「補説」において、『雨月物語』の「夢応の鯉魚」「貧富論」の二編は、①教訓を示すという構成、②人間性の批評という二点で初期談義本と類縁関係にあったと指摘している（鶴月洋『雨月物語評釈』角川書店、一九九六年、六九六～六九八頁）。

一〇 穴戸道子、高松亮太「諸道聴耳世間狙」評釈」『近世文芸 研究と評論』七五号、二〇〇八年、七九～九八頁

一一 石塚尊俊「三匹猿」『日本大百科全書』一〇、小学館、一九八六年、四五九頁

一二 「守庚申」とは、長生きするために庚申の夜は眠らずに身を慎むようにすることである。三戸が庚申の夜に天に昇り、天帝にその人の罪科を告げると早死にすることによって由来する（佐々木勝「庚申信仰」『日本大百科全書』八、小学館、一九八六年、七五〇頁）。

一三 前注に同じ。

一四 寺島良安『和漢三才圖會』上巻、和漢三才圖會刊行委員会編、東京美術、

- 一九八九年、四六頁、あわせて島田勇雄、竹島淳夫、樋口元巳訳注『和漢三才図会』一、平凡社、一九八七年、二四九〜二五二頁も参照した。
- 一五 注五に同じ。本稿は、庚申信仰と三猿について飯田に多くを学んでいる。
- 一六 その後、明治時代の神仏分離令、淫祠禁制によって庚申塔の造立は止められたとされる。
- 一七 飯田道夫『見ザル聞ザル言わザル——世界三猿源流考——』三省堂、一九八三年、二〇〜二二頁。たとえば、猿の姿が確認できる断本として初代風音八が書いたとされる『鹿の子餅』（明和七（一七七二）年刊行）があげられる。序の「山の手を飛歩行尻やけ猿、下町にすむ腹つぶくれ、いずれ與おとしばなしをせざりける。」と対句表現のなかに猿は登場する。「尻やけ猿」の元々の意味は、せっかちで落ち着きがなく一つのことに集中できない人のことを指す。ここでは、「腹つぶくれ」（裕福で太っており、動作が緩慢な人）と対になっていることから、貧乏で忙しく動き回る人を意味している。人の性質を嘲って示すために使用されているものの一つで、笑いと猿の結びつきを示す用例といえよう。
- 一八 延広真治『烏亭馬馬』『新版 近世文学研究事典』おうふう、二〇〇六年、一五五頁
- 一九 延広は「咄の会とは複数の人物が寄り合い、落咄を互いに披露する集まり」と説明する（延広真治『江戸落語 誕生と発展』講談社、二〇一一年、六二頁）。
- 二〇 「解説」小高敏朗校注『江戸笑話集』岩波書店、一七八一年、一五頁
二一 前注に同じ。
- 二二 「落断 無事志有意」注二〇、四五一〜四五二頁
- 二三 「猿は人間にきわめてよく似ているが、毛が三本足りないで人間の高等さにはおよばないという俗説」に基づく（『日本国語大辞典』縮刷版第五巻、小学館、一七八七年、一六八頁）。
- 二四 成美と秋成を比較したものとして、遠藤誠治「夏目成美論——成美と秋成、美と実生活をめぐって」がある。遠藤は、成美の俳句の文字遣いや女性の執着心をテーマにした作品から、成美が秋成の著作を読んで意識していたのではないかと論じている（『俳句』二七巻二号、一九七八年、二〇六〜二一八頁）。
- 二五 頼原退蔵編註『俳文俳論新選』大倉廣文堂、一九三五年、一〇三〜一〇五頁
二六 注一、一七頁
- 二七 「莊子」からの影響を論じる李婷は、序文からは作品を自らとは独立したものであるという「寓言論」に似る物語に対する本質的な認識と、素材となったモデルの噂話・情報と物語に対する「齊物」的な認識（「自らが発したことは受け取る者によって、本意とかけ離れたものになるが、元となった内包は一つであるという認識」）が読みとられると述べる（李婷「上田秋成と『莊子』——『諸道聴耳世間狙』の序文を中心に——」『同志社女子大学文学研究年報』第六五巻、二〇一四年、一二四〜一八頁）。
- 二八 森山重雄『上田秋成初期浮世草子評釈』国書刊行会、一七七七年、二八頁
- 二九 金谷治訳注『莊子』第一冊、岩波書店、一七七四年、六〇〜六一頁
三〇 注一九、五七〜五九頁
三一 注二、一二三頁
- 三二 「講釈・落語と文学」では、落咄の会のメンバーは「咄仲間」、リーダーは「咄仲間の頭取」、咄の順番に当たたる人物は「咄番」と呼ばれていたと説明される（『講座 日本文学の争点』四巻近世編、明治書院、一九六九年、二八六〜三〇九頁）。
- 三三 馬馬は大田南畝や朱楽菅江らを中心に狂歌の知己を招いて「咄の会」を組織的、かつ長年にわたって主催した。その成果の結実が『喜美談語』（寛政八年）、『詞葉の花』（寛政七年）、『無事志有意』である（注一九、六二〜六三頁）。

三四 『世間狙』は「当代の医者・僧侶・神官・芸道の師匠といった所謂文化人・知識人の墮落と軽佻浮薄を皮肉的に描き、批判精神の強さにおいて談義本に通ずる」とされる（長谷川強監修『浮世草子大事典』笠間書院、二〇一七年、一二三頁）。

三五 鈴木久美『近世噺本の研究』笠間書院、二〇〇七年、二〇七頁

三六 『落噺無事志有意』は書肆名を欠いている。

三七 噺本の盛衰の時期区分、上方から江戸への流れの移り変わりは、武藤禎夫『噺本』『日本古典文学大辞典』第五卷、岩波書店、一七八四年、九八〜九九頁を参照している。

三八 野口は秋成の浮世草子二作品を「両作品はどう隠しようもなく秋成的」（二七頁）として、これを「灰汁」とも言い表している（野口武彦「性格悲劇としての『笑い』——上田秋成の初期浮世草子」『ユリイカ』一七巻一三号、一七八七年、二四〜三七頁）。

三九 二之巻一回「孝行は力ありたけの相撲取」注二、一七七〇年、四一〜四六頁

四〇 二之巻二回「宗旨は一向目の見へぬ信心者」注二、四七〜五二頁

四一 五郎市の名は安土桃山時代の盗賊・石川五右衛門の息子の名を借りて付けられたとされる（注二八、一一五頁）。

四二 浅野三平は本話を「内容が年寄りの舞妓と手くせの悪い蔭間との二つから構成されていて、少し安定性を欠き、成功作とはいえない」と評価する（浅野三平『上田秋成の研究』桜楓社、一七八五年、一〇二〜一〇三頁）。

四三 三之巻三回「雀は百まで舞子の年寄」注二、一七七〇年、七七頁

四四 風間誠史「和訳太郎の方法——「諸道聴耳世間狙」「世間妾形氣」「書初機嫌海」「癩癩談——」『國文學 解釈と教材の研究』四〇巻七号、一七七五年、三七〜四三頁

四五 注四三、一七七〇年、七八頁

参考文献

浅野三平『上田秋成の研究』桜楓社、一七八五年

飯田道夫『世界の三猿 その源流をたずねて』人文書院、二〇〇七年

飯田道夫『見ザル聞ザル言わザル——世界三猿源流考——』三省堂、一七八三年

鶴月洋『雨月物語評釈』角川書店、一七七六年

遠藤誠治『夏目成美論——成美と秋成、美と実生活をめぐって』『俳句』二七巻二号、一九七八年、二〇六〜二一八頁

金谷治訳注『莊子』第一冊、岩波書店、一七七四年

近衛典子「研究史を知る 秋成の浮世草子」『西鶴と浮世草子研究』五巻、二〇一一年、二二九〜二三三頁

二〇一一年、二二九〜二三三頁

島田勇雄、竹島淳夫、樋口元巳訳注『和漢三才図会』一、平凡社、一七八七年

田中伸「気質物の方法とその限界」『近世文藝』一号、一七五四年、四八〜

五六頁

西島孜哉「気質物成立考」『文学史研究』一四巻、一七七三年、四一〜五一頁

延広真治「烏亭焉馬」『新版 近世文学研究事典』おうふう、二〇〇六年、

一五五頁

久松潜一、麻生磯次、市古貞次、五味智英監修『講座 日本文学の争点』四

巻近世編、明治書院、一九六九年

李婷「上田秋成と『莊子』——『諸道聴耳世間狙』の序文を中心に——」『同

志社女子大学学術研究年報』第六五巻、二〇一四年、二二四〜二一八頁